

失敗と限界を超える神

(創世記一七・一〜二七)

四五・三%。わが国の二〇一二年の一般刑法犯の再犯率(交通事故等の過失犯を除く)である。一般刑法犯自体は八年連続減なのだが再犯率は一六年連続して上昇。このことについて多くの分析がされているが、中でも興味深いのは出所後職を得るかどうかで再犯の確率が大きく変わってくるというデータである。有職者の再犯率は八%に満たないのに対し、無職だったものの再犯率は四割に迫る。このこと一つを取り上げても所謂厳罰主義だけでは問題の解決にはならないことが解る。過去の罪を丁寧に加え、彼らを白眼視しているだけでは堂々巡り、いやそれ以上の悲劇が引き起こされかねないのだ。今朝の個所は九九歳になったアブラムに神が現れ、契約を結ぶ個所であるが、そこに示された神はアブラムの過去と現在を越えるお方である。以下それを見ていきたい。

一、過去の失敗を数えない神

説教者はこのシリーズを『信仰の父アブラハム』と名付けたがこれはごく標準的なタイトルだと思し、新約聖

書の影響も感じられるようにも見える。しかし実際に創世記のテキストを追って行くと、アブラムの人生が信仰から信仰、勝利から勝利という所謂「二辺倒」とは程遠いことが良く分かる。サバイブするためにファラオの前で妻を妹だと偽ってみたり(一一・一三)、約束どおり子どもが生まれないと見るや、神の前で妙に自嘲的にふるまってみたり(一五・三)、そして前章においては、妻サライの極めて人間的な提案を無批判に聞き入れ、結果女の戦いが勃発するとそれを止める勇気もないと言った具合である。ここまでのアブラムの人生は正に「つまづいたり、ころんだりする自然な人生(相田みつを)」だった。時に人間は自身が失敗を繰り返す存在でありながら、それをする他者を赦せない存在である。自分の頭上の蠅を追わずに、人を断罪することがしばしばである。だが神はどうだ。神は彼の失敗を数え、彼を断罪しただろうか。否、である。失敗まみれの人生で九九歳に至ったアブラムの過去を神は見ることをせず、アブラムと間に恵みの契約を用意されたのである。

二、現在の限界を見ない神

このような極々普通の人間であるところのアブラムに対し、神は不妊の女、サライに子を与えること、その子孫をお

びただしく増やすこと、改名した名前のアブラハムが示すように「諸国民の父」と呼ばれるようになる事、更にはカナンを所有させること、そしてご自身は子々孫々に渡ってアブラムの神になることを約束した。これは正に「法外」の契約であり、恵み以外の何物でもなかった。だがその神の恵みに対しアブラハムはどう応答しただろうか。一七節には「アブラハムはひれ伏し、そして笑った」、更にアブラハムは心の中で「百歳の者に子どもが生まれようか、サライにしても九十歳の女が子を産むことができようか」と言ったとある。彼は自分の男性性としての力の限界を思い知らされていた。またローマ四章によればサライの胎が「死んでいた」のを知っていた。だから神が如何に彼に未来を語っても、その約束をすぐには信じる事ができなかったのだ。だからどう鼻真目に見てもこの時のアブラハムの信仰はごく限定的なものであった。しかし神はこの限定的、いや見ようによつては冷笑的にすら見えるようなアブラハムの態度に目くじらを立てることはせず、サライが男の子を産むこと、その名が「笑い」を意味するイサクとなること、そしてこのイサクこそが約束の子になることを宣言されたのである。神は私たちの弱さや限界を見て、あきらめるお方では決してないのである。

* * *

神の語りかけを聞いたアブラハムはその日の内に一つのことを行った。それは神が恵みの契約の締結のしるしとして与えた儀式たる「割礼」であった。彼はこの神の語りかけを聞いた「その日」に自らをはじめ「全ての男子」に行ったのである。これは彼が神の前に全き者となったことを表している。だからこの文脈における「全き者」は道徳的完全さを意味していない。寧ろ神との正しい関係を得たということの表現である。神の余りの恵みの大きさの前に、彼は応答せずにはおれなかつたのであり、その応答を信仰というのである。

福祉先進国ノルウェーに「世界一の刑務所」がある。素敵なソファベッドにテレビ、冷蔵庫。週一回はスーパーで買い物ができ、ジムはおろか、ボルダリングも出来るという充実ぶり。「こんなに快適だったら、みんな出戻るのは？」という疑問が生まれるが、かの国の再犯率は一六%、ヨーロッパ最低である。犯罪者だから、失敗者だからとレッテルをはるのではなく、更正の機会を与えるべく真実な愛をそそぎ、変革へと導く。この姿は何か似ている。普通の人間であるアブラハムを愛し続ける神の姿にである。主はいつくしみ深く、恵みはとこしえまで。ハレルヤ!